

# 歴史散歩



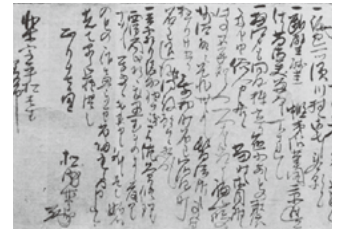
## らくさい 平松楽齋と松浦武四郎

半田の清溪靈苑の一角に仏眼寺墓地があり、たくさんの墓石が立ち並んでいます。その中に「平松楽齋居士墓」と書かれた墓石があります。ここが江戸時代後期に津藩の郡奉行などの要職を務め、学者としてもその名が知られた平松楽齋の墓です。また、隣には弟子が建立したことを示す「門人中」と書かれた石灯籠が立てられています。

平松楽齋は、本名を正愨まさよしといい、通称は健之助、後に改めて喜蔵きぞうと名乗ります。自分の住まいを至楽窩しらくかと称し、略して楽齋と号しました。楽齋は、寛政4(1792)年に藩医であった河野通賢の次子として生まれ、学問に励み20歳の時に平松家の養子となりました。その後、津藩士として江戸で10代藩主藤堂高兌たかさわに仕えたのちに津に戻り、藩の将来を支える人材育成の拠点となった藩校有造館ききんの創設に参画します。また、天保の飢饉の際には領民の救済に尽力するなど、民政家としても名を残し、嘉永5(1852)年、61歳でこの世を去りました。

津市教育委員会には、寄贈された平松楽齋関係の資料が保管されており、大塩平八郎や齋藤拙堂など、当時の多くの学者と幅広い交友関係が

あったことが分かります。その中には、今年で生誕200年を迎え、北海道の名付け親として知られる松浦武四郎がおり、楽齋と武四郎の間で交わされた書簡(写真右)も50点以上残されています。



文化15(1818)年に生まれた松浦武四郎は、文政13(1830)年、13歳の時に平松楽齋が開いた塾に入り、楽齋を師として学問を学びました。武四郎が楽齋の下で勉学に励んだのは、最初の旅に出た16歳までの短い期間でしたが、全国の国学者や儒学者、本草学者などと幅広い交流を持っていた楽齋との出会いは、若き日の武四郎に大きな影響を与えたと考えられています。

11月11日(日)まで、三重県総合博物館MieMu(一身田上津部田)では、企画展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎」が開催されており、会場には武四郎が楽齋に宛てた書簡なども展示されています。この機会に江戸時代の学者たちの活発な交流に触れてみてはいかがでしょうか。



平松楽齋像  
出典:「津市文教史要」



平松楽齋の墓と石灯籠

